

## 陸亀蒙の隠居について

胡, 山林  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9660>

---

出版情報：中国文学論集. 25, pp. 35-53, 1996-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 陸龜蒙の隱居について

胡 山林

詩人陸龜蒙（？—八八二）は一生生涯官職に就くことのなかつた晩唐時代の代表的な隱逸文人である。彼の事跡については、『新唐書』卷一九六の隱逸伝に記録がある。他の外伝は記録が簡単にすぎ、内容にも目新しさが無い上に若干の誤りさえみられるため頼ることができない。そのような資料的背景により彼の伝記は詳細には分からないのが現状である。<sup>〔1〕</sup>現在すでに成されている考証のうち、一番詳しいものは『唐才子伝校箋』<sup>〔2〕</sup>であるが、それも完全とは言えないので、こういつた研究の状況から考えるに、陸龜蒙の事蹟、特に彼の隱居に関する事情については、今後さらに深く追究する必要があると思われる。小論は現存する資料に基づいて、彼の隱遁に関する考証をより一歩進めようとするものである。

## 一

陸龜蒙の生年について、本伝及び他の書籍にはその記事を載せない。このことは従来ずっと問題にされてきたが、いまだに解答が得られないので、ここでは彼の文学作品の中から手がかりになりそうな文章を見つけてみたい。陸龜蒙は『送豆盧処士謁丞相序』のなかで「昔丞相未だ甲科に升らざるの時、年才かに弱冠を出づ。龜蒙幸に其の中に参遊するを得て、以てこれに兄事し、許して與に膠固たり、詠歌に形はす。」<sup>〔3〕</sup>と言っている。この「丞相」とは豆盧瑑を指すのだが、『新唐書・僖宗本紀』によると、豆盧瑑は乾符五年（八七八）五月に戸部侍郎から兵部侍

陸龜蒙の隱居について（胡）

郎へとなり同時に中書門下平章事を兼職し、広明元年（八八〇）十二月には黄巢軍の乱中に命を落としたという。豆盧処士が長安へ豆盧瑑丞相に拝謁するために出かけた時期は、乾符五年五月から広明元年十二月にかけての間であつた可能性が高いが、その二年半のうち、乾符六年（八七九）には黄巢軍はもう江南地方の大部分を攻め落としており、広明元年には長安を攻略していたのであるから、豆盧処士が混乱のさなかにあつた長安に行くのは困難であつたと考えられる。従つて、豆盧処士は乾符六年までに長安に赴いた可能性が最も高い。また、この『序』に「亀蒙は江湖辺の叟、病みて起つこと能はず、一耒もて耕し、一船もて漁す、文三十編有り。」と述べるように、乾符六年以降陸亀蒙は病気を患いながらも、同年に自分の書いた文章を『笠澤叢書』として編纂している。このことから『序』が乾符六年に書かれたものであり、豆盧処士が同年に長安に行つた事実も判明する。その他、『旧唐書』の本伝によると、豆盧瑑は大中十三年（八五九）に進士に及第したのであるが、亀蒙は「弱冠」、つまり二十歳に達しない頃に、兄を通じて彼に仕えていることから、陸亀蒙が禄を求めて科擧に応じた最初の年齢は、多くてもせいぜい二十歳前後までであつたと考えられる。豆盧瑑が同年に進士になつた可能性もありうるので、陸亀蒙の生年は唐文宗開成三年（八三九）だと判断するのが最も妥当であらう。いずれにしても陸亀蒙は開成のはじめから大中のはじめにかけて生まれたことになる。

一方、陸亀蒙の卒年については、『新唐書』本伝にみえる「中和の初に疾を遭し卒す」というのが定説とされている。中和というのは皇帝李環の年号であり、西歴八八一年から八八五年の間であるから、「中和初」とは八八二年までだと考えて良いであらう。『唐才子伝校箋』の作者は『新唐書』の観点に賛成したうえで、陸亀蒙の『自憐賦並序』の中の「余、病を抱くこと三年、衝泌の下に於てす」「行くときは則ち人を左にし、杖を右にす、臥す時は則ち夕に擁して晨に祛く」「空山に老死してやむ」などの語を根拠に、この文章が中和二年に書かれたと断言する。しかし、『自憐賦』を深く読めば、「病を抱くこと三年」という句中の「病」が乾符六年に患っていた病気を指すとは言えないことがわかる。したがつて、実際のところ、陸亀蒙は中和二年に死んだであらうと確信されるが、もっと明確な資料を挙げてこの文章が中和二年につくられたことを証明すべきであらう。

『自遣詩序』には次のように述べる、「自遣詩は、震澤別業にて作る所なり、故疾未だ平らかならず、厭厭たり

田舎の中、農夫日に耒耜を以て相聒するを事とし、毎に夜分に至るまで睡らざれば則ち百端興懐し人思を攪し、益々紛乱して緒なし」と。文中にある「故疾」は亀蒙が乾符六年以来ずっと思っていた病気を指すのであろうが、その病気がよくならないうちに亀蒙は震澤に移り住んだようである。『自遣詩』の内容は、この詩が何時書かれたかを示すものであるが、その二十九首には「貞白、丹を求めて姓名を変え、主恩潜助するもまた成ることなし、侯家竟に梁の天子を換え、王整徒勞に外兵を作す。」と言う。これは南北朝時代梁の国が侯景の乱のために亡びた典故に基き、「梁の天子を換え」というのは黄巢軍が長安を占領したことを指しているので、広明元年（八八〇）にこの詩を書いたことは疑いない。この詩の中では、陸亀蒙自身の病気が重いと書かれていないので、その後すぐに病卒した可能性は薄いように思われる。こうしたことから判断するに、陸亀蒙は中和二年の際、再び病に陥ってから、今度は治ることなく逝去したと考えられるのではあるまいか。ところでこの連作詩第一首の冒頭に「五年重別旧山村（五年重ねて旧の山村に別る）」という句があり、ここから詩人が震澤に住んでから五年後に一度そこを離れたと解釈できるが、しかし、そこで一つ時間的な矛盾が生じる。まず、『自遣詩』は先ほどの考証によれば広明元年に書かれたものなので、「五年重別旧山村」の内容はその一年前即ち乾符六年に陸亀蒙が笠澤に住んでいた事実と符合しないのである。また、もしも亀蒙が広明元年に震澤を離れ、その後もう一度震澤に戻って来たとするならば、卒年として一番早く考えられるのは、中和末年ということになるが、これは『新唐書』の説明と合わない上に、諸事情を考慮した上でも正確ではないと思われる。たとえば、皮日休は広明元年に黄巢軍に殺されたのだが、もし陸亀蒙が中和年間にまだ生きていたとすれば、必ずや皮日休の死を知り、詩文を作り哀悼したはずである。しかし、現存の詩文のなかには、皮日休の死に言及したものは全くない。そこでこの矛盾を解決するために、『全唐詩』が「別」字に「一作到」と注していることに注目したい。つまり、「五年重別旧山村」は「五年重到旧山村」となり、震澤を離れて五年後にまた震澤に戻って来たとして解釈するのであるが、この説に従えば矛盾は一切生じない。そこから考えを推し進めて、もし陸亀蒙が中和二年（八八二）に亡くなったとすると、大体四十三歳ごろ病死したということになるであろう。

## 二

『唐才子伝』卷八は「亀蒙、字は魯望、姑蘇の人なり」と言い、『唐摭言』卷十は「陸龜蒙字は魯望、三呉の人なり」と言う。また『北夢瑣言』卷十には「唐呉郡の陸龜蒙」と作る。『全唐詩』の作者小伝にも彼が「蘇州人」であると述べられている。姑蘇、三呉、呉郡とその呼称こそ違うものの指す場所は皆おなじであるから、この点に關しては問題がない。

『唐詩記事』卷六十四に「亀蒙、三呉人であり、……姑蘇に居る」とあるので、陸龜蒙は出身や戸籍またその居所もすべて蘇州であったと考えられる。ところで陸龜蒙の家は蘇州の何処にあったのだろうか。陸龜蒙の出身は蘇州の中でも蘇州府であったらしい。彼は二カ処に家を置いたようだが、その一つは長洲の甫里にあり、もう一つは蘇州城内の臨頓にあったと伝えられる。唐代に、蘇州府が置かれ、呉郡、長洲、嘉興、海塩、常熟、昆山、華亭の七県を管轄し、その府の所在地が蘇州城であった。唐代にはまた長洲県が置かれ、先秦時代の呉国の長洲苑にちなんで長洲とよばれた。『元和郡県図志』には「もと、萬歲通天元年、析ちて呉県を置き、長洲苑を取りて名と為す。苑は県の西南七十里に在り」と言う。『呉郡志』卷十三の『祀廟下』の「甫里廟」には「甫里は長洲県の東南五十里に在り、郷人陸龜蒙を此に祀り、今に至るまで廃さず」と記されている。甫里は先秦時代の呉の宮殿があったことと有名であるが、陸龜蒙はそのことについて「甫里の郷を呉宮と曰ふ、長洲苑の東南五十里に在り、夫差の幸する所の別館に非ざらんや? 凶籍を披くも、其の説を見ず、老に詢るも其の地を得ず。其の名は存するも、其の跡は滅す。悵然として懐古の思ひ興りて、『問呉宮辞』を作る」(『問呉宮辞序』)と述べており、『呉郡志』卷八に「呉宮の郷、呉江県の甫里の地に在りて、今の長洲県の東南五十里に在り。呉王の別宮と相伝ふ。然れども挙げて旧跡なし。陸龜蒙嘗て『問呉宮辞』を作る」と記録されている。これによれば、陸龜蒙の家は呉宮の古跡からあまり遠くない所にあつたと考えられる。現在も甫里鎮という場所があり、陸龜蒙の墓はそこに残っている。陸龜蒙『甫里先生伝』の自注は「甫里、松江の上の村墟の名」と言う。甫里は松江の岸辺に位置している。松江は昔笠澤と言ひ、『郡齋讀書志』は笠澤を松江の地名であるとする。『左伝』に「越は呉を伐つに、笠澤に軍す」という記

録もある。つまり笠澤は松江を指しており、陸亀蒙が『笠澤叢書序』において述べた「笠澤」は具体的には松江の甫里を言うのであろう。松江はまた松陵とも呼ばれた。陸亀蒙と皮日休が唱和して編んだ作品集の名を『松陵集』（陸亀蒙、皮日休の詩三四二首と崔璞の詩三十一首を収める）と言うが、これは川の名前に因んでつけられた書名なのである。

陸亀蒙の家が蘇州に二カ処あることについては、『姑蘇志』に詳しく述べられている。『姑蘇志』<sup>10</sup>に言う、「陸魯望の宅は臨頓橋に在り。皮日休云はく、『郭郭を出でずとも、曠きこと郊墅のごとし』と。魯望の『幽居賦』に云はく『陸子は全吳の東に居る、長洲の故苑より距つこと一里』と。又云はく『地は虎丘に接して、門は鶴市に臨む』と。又別墅の甫里に在る有り、魯望は此に躬耕す。地は数畝有り、屋は三十楹有り、田奇は四百畝有り。其の居、後に白蓮花寺為り、祠堂を立て像を塑る。」と。臨頓とは里の名前で、恐らくは蘇州城内にあった。『呉郡志』卷九の『古蹟』には次のように言う、「臨頓、旧くは吳中の聖地たり。陸亀蒙これに居り、郭郭を出でずとも、曠きこと郊墅のごとし。今城の東北に臨頓橋有り」と。また卷十七にも言う、「臨頓橋、長洲県の北に在り。臨頓、吳の時の館名、これを臨頓の宅に取るは、是あり。……唐の陸魯望常に其の旁に居る」と。臨頓というのは陸亀蒙と彼の一族が住んでいたところで、松江甫里は陸亀蒙が隠居して耕作した場所だと考えられる。

『南部新書』及び『唐詩紀事』には震澤に陸亀蒙の別荘があったことを記す。『南部新書』丁に言う、「陸亀蒙震澤の南に居る」と。また『唐詩紀事』卷六十四の六も「亀蒙震澤の南に居る」と言う。清の道光年間に編まれた『蘇州府志』卷七は震澤県に「鴨漪亭」があったと言い、「陸亀蒙鴨を此に養ふと伝ふ。故に名づく」とある。震澤とは古代の太湖の別称であり、『元和郡県図志』に「太湖は県の西南五十里に在り。『禹貢』これを震澤と謂ふ。『周禮』にこれを具区と謂ふ。湖中に山有りて、洞庭山と名づく」という。陸亀蒙は震澤に昔から別荘を持っていたようであるが、それが太湖のそばに位置していたのであろう。『呉郡図経統記』<sup>11</sup>卷下は陸亀蒙が「初め、郡中の臨頓里に居る、晩に益々遠引深遁し、震澤の旁に居り、自ら甫里先生と号す」と述べ、また陸亀蒙の『笠澤叢書序』にも「乾符六年の春より、病もて笠澤の浜に臥す」という記録がある。ところで『小鷄山樵人歌』は乾符六年九月に甫里で作られたので、そのことから、彼が震澤の別荘へ引っ越してから逝去するまでの時間はわずか三、四年と

陸亀蒙の隠居について（胡）

いう短いものであったことになる。

## 三

『新唐書』の本伝及び他の書物は陸龜蒙が「挙進士、一不中（進士に挙げらるるも、一に中らず）」であったと記している。これは科挙を一回受けて失敗して、その後再び進士の試験を受けることはなかったという意味であるが、陸龜蒙と同時代の文人達は科挙に一回失敗したからといって諦めたりはしないのが常であった。晩唐時代には数十年間に数十回も科挙を受験した者が山ほどいる。陸龜蒙が何回科挙に挑戦したかは不明であるが、数回参加したことは確かであろう。陸龜蒙の『帰路』という詩には「漸く新豊の路に入れば、袁紅小橋に映ず、渾べて七年の病の如く、初めて一丸銷すを得たり」という。新豊は長安の東にあり、漢の高祖劉邦が父親の故郷に対する思いを慰めるために、郷里の江蘇新豊県に模倣して作られた場所である。地理的に見て陸龜蒙が長安から蘇州に帰る時には新豊を通過したであろうと考えられ、また「袁紅」というのは暮春の頃、花の色が褪せていくことを指すので、これは明らかに落第して詠んだ詩であると解釈できる。したがって陸龜蒙が試験に参加した後、しばらくの間郷里に帰っていたことがこの詩から推察されよう。進士に登第した人々は普通長安に長く滞在して、吏部の試験の準備を続け、一部の人は有力者と広く交際したりもするのであるが、陸龜蒙は試験に落第したために、疲労困憊し、重病にかかったようになり、家に帰って養生した未にとよくなったのであろう。

『奉酬襲美先輩吳中苦雨一百韻』の詩を読むと、陸龜蒙は咸通十一年にも科挙の試験を受けたことが分かる。この詩には言う、「尋いで聞く天子の詔、赫怒して叛卒を誅せよと。宵旰して丞黎を憫み、謨は明らかに征伐を問ふ。王師継ぎて下ると雖も、賊壘未だ即ち抜かず。此の時の淮海波、半ば是れ生人の血」と。これは、僖宗の咸通九年に起きた徐州の彫勳の武装反乱を指す。この反乱は二年間ほど続き、南方の地方に広く波及し、朝廷の統治に大きな影響を与えた。彫勳は咸通十年に死んだが、反乱は咸通十一年になってから朝廷によって完全に平定された。咸通十年の彫勳の反乱のため、朝廷は各地方の科挙試験を停止するよう命令し、おなじ内容の命令を咸通十一年にも

う一回発表した上に、朝廷の禮部の試験も中止したと言う。そのため、咸通十一年の進士はいない。『登科記考』卷二十三の咸通十一年にも「四月の戊子、敕に曰はく去年属するに用軍の際を以てし、權に貢奉一年を停む。今即ち偃戈すれば、却つて宜しく旧によるべし。来年宜しく別に三十人の及第を許すべし、進士十人、明經二十人、已後、援例とするを得ず」と記されている。そこで亀蒙は次のように言うのである、「伊余は將に貢技あらんとするも、未だ恥有りて刷するべからず。却つて、漁樵に津を問ひ、重ねて煙雨の雲に耕す」と。これによると、陸龜蒙は咸通十一年に長安に着いてはじめて科挙試験が中止になったと知つたため、試験に参加することができずに蘇州に戻つたのである。ところで咸通十一年長安に到着した後に初めて試験が中止になったことを知つた受験者は多い。陸龜蒙も当時すでに科挙の試験を受ける資格を持つていたにもかかわらず、試験の停止により禮部を受験することができなかつた不運な一人だつたのであろう。以上の分析によつて、陸龜蒙が科挙受験に一回しか参加しなかつたという説は間違ひであることが判明する。ちなみに『唐才子傳校箋』はこの詩を引いて、他の書に述べる「一不中」といふのは咸通十年の科挙試験中止の際のことをさすのであろうと推測する。また『唐才子傳校箋』は陸龜蒙が長安に行かなかつたと考へるが、これは詩の原意に反するので同意することはできない。

皮日休は咸通十三年（八七二）に蘇州を離れ、咸通十四年（八七三）から乾符四年（八七七）までの間に太常博士に遷り、乾符四年の秋には貢士の試験を担当した。その時彼は手紙で陸龜蒙に貢奉試験を受けるよう勧めており、陸龜蒙は『秋賦有期因寄襲美時主持貢士』という詩を作つて、「雲は無心の似く水は閑の似し、忽ち名の貢書の間在るを期す。煙霞と鹿弁 聊か懸著し、隣里と漁樵し暫く解還す。文章は病み来りて猶は篋に滿つるがごとく、薬苗衰みし後に即ち山を離れたり。広寒宮に樹枝多少、風高低に送れば便ち攀る」と返事をした。この詩が表明する如く陸龜蒙には試験に参加する意志があつたものの、恐らく病気で行くことができず、結局は受けなかつたのである。その後、陸龜蒙は一回も科挙の試験を受けなかつたので、咸通十一年の試験が最後の科挙受験となつたと考へられる。



## 四

陸龜蒙が一生の中で仕官をしたかどうかについては、明確に考証するのは困難である。『唐才子伝』に言う、「嘗て張博に従ひて遊び湖、蘇二州を歴し、將に辟くに自佐を以てす。」と。張博の一生の事跡については、兩唐書に伝が無い。彼は咸通十三年に湖州刺史になった。『嘉泰吳興志』<sup>16</sup>卷十四には「張博は咸通十三年七月に中大夫を拜せらる」と記されている。一方、陸龜蒙は咸通十一年の科挙を受験せず、咸通十年から咸通十三年までの三年間は主に蘇州に居た。彼は咸通十三年以後、湖州の張博のもとに行きその幕僚となった。張博は三年余り湖州刺史を勤め、乾符二年（八七五）二月に湖州から廬州の刺史に転じた。これに関して、『旧唐書』卷十九の下『僖宗紀』に「湖州刺史張博を以て廬州刺史と為す」との記録がある。しかし、彼が廬州刺史であった期間は短く、乾符三年（八七六）にはまた蘇州刺史の任に赴いている。というのも、『吳郡図經統記』卷下に「唐乾符三年、刺史張博は此の城を修し完る」と述べる所から、張博が乾符三年にはすでに蘇州にいた事が判明するのである。張博が廬州の刺史の任に赴いたことについては、『北夢瑣言』だけに記録があり、『吳郡志』卷十一の『牧守』に述べる「湖州の刺史から蘇州に転任した」などの文章は、彼が廬州刺史になったことを見落としている。陸龜蒙は張博に従って湖州と蘇州に行ったのであるから、廬州でも張博の幕下に入ったと考えられよう。陸龜蒙は張博に従って乾符二年湖州に行き、乾符三年にはもう蘇州に戻っている。『吳郡志』卷十一の「辟くに自佐を以てす」という記述から、張博の幕下に入った可能性はやはり高いといえるであろう。

張博の幕僚となる前に、陸龜蒙が幾度か官職を求めたことは十分に考えられる。『新唐書』の本伝には「嘗て饒州に至り、三日詣る所なし、刺史蔡京官属を率いて就きて見る。龜蒙樂します、衣を払ひて下る」と言う。『校箋』はこの内容について咸通元年（八六零）頃のことだと考証した。他の各書もこのエピソードを記すが、それらの記録の間には、仕官を求める時期と刺史の名前と、陸龜蒙の態度に関して少し出入りがみられる。

関係ある史書やその他の野史、隨筆などのほか、陸龜蒙の作品中にも地域の官吏との交際の様子が描かれている。彼の『引泉詩』の「上位を嗣ぎて六載、吾宗は桐川に刺たり。余来たりて旌旗を拜す、詔下りての明るる年。時

事は春三月、郭を繞る花蟬聯たり」という語や、『丁隱君歌序』の「余嘗て南のかた桐江に浮かぶ……咸通丙午の年に當る、今に逮ぶまで十四年」という語はみなこの幕僚の時のことを詠んでいるのである。咸通年間に丙午の年は存在しなかつたうえに、陸龜蒙の一生の中には一度も丙午の年がめぐってこなかつたことからして、詩中の「咸通丙午」は実は咸通七年の丙戌を指すと考えられないであろうか。『嚴州圖經』卷一の『賢牧』に「陸壩、咸通五年十二月五日、塩鉄江淮知後金部郎中を拜せらる」とある通り、咸通五年（八六四）に陸壩は陸州刺史に任ぜられたのであるが、その翌年に、陸龜蒙は陸州へ行ってその幕僚となつたことも考えられる。しかし、陸龜蒙が『引泉詩』に述べた「授くるに道士の館を以てし、榻を東偏に置く。満院碧樹に声し、空堂老仙を形どる。本性は寧淡を樂しみ、及び來りて更に玄虚」ということばには、仕官しようとする強い意志が全く感じられないので、あるいはその時には幕下に入らなかつたかもしれない。

崔璞は咸通十年（八六九）に蘇州刺史になつた。皮日休はその年に蘇州に赴いて、崔璞の幕府に入り、崔璞に陸龜蒙を推薦したようである。それは皮日休の詠んだ『吳中苦雨因書一百韻寄魯望』という詩の中の「我公は大司諫、一切民の欲に従ふ。……我は先生を薦めんと欲し、左右司牧を輔く。茲雨何ぞ足れりと云う、唯だ顔歎を挙げんと思ふ」という文句から知ることができる。陸龜蒙の詩集のなかには崔璞と唱和した作品が残されているが、陸州行きの時と同じように、陸龜蒙が官吏になつたという記述はその中にほとんどみられないので、幕下に入ったかどうかを判断することはむずかしい。『吳郡志』卷十一には「崔璞咸通中司諫を以て郡と為す。文采風流有り、郡中に秀才相従ふ。詩詞有り、即ち僚属及び名士に命じて庚和せしむ、其の郡を去る時に、皮、陸皆篇に和する有り」とあり、また同書卷五十の『雜志』にも「咸通中、崔璞吳郡に守たり、時に皮日休部の為に従事し、処士陸龜蒙と文会の友たり。風雨晦明、蓬蒿翳會、未だ嘗て詩を作らず。璞間に詩を為し、また兩人をして風和せしむ」と述べられている。つまり二つの書は陸龜蒙が幕府に入ったことに言及していないのである。

前にも述べたように史書の記述は、陸龜蒙の張博への従事が彼の生涯における最初で最後の仕官であり、その後彼は郷里へ帰り隠遁したとする。『全唐詩』の作者小伝にも「蘇（乾符三年）、湖（咸通十三—乾符二年）二郡の従事に辟き、松江の甫里に退隱す」とある。その後の陸龜蒙の足取りを辿つてみるに、乾符四年から五年の間に彼

は一回湖州に行き、湖州刺史鄭仁規に拜謁しているが、恐らくこの時は幕府に入らなかつたであろうと考えられる（このことについては、『校箋』の具体的な考証を参照されたい）。

陸龜蒙は晩年に朝廷に招聘された可能性がある。例えば、『新唐書』本伝には、彼が高士として朝廷に招聘されたという記録がある。しかし、戦乱のさなかやあるいは病氣中であれば、仕官する意志も萎えてしまうため、結局陸龜蒙は最後まで官吏にならなかつたのであろう。『新唐書』本伝は唐の光化中、韋莊が陸龜蒙の死後、彼に官位を与えようと朝廷に上書したため、右補闕という称号が授けられたことを述べる。これについては、諸書に記録があるが、そのうち、『容齋三筆』の記述が一番詳しく、その巻五には「唐の召宗の光化三年十二月、左補闕韋莊奏す、詞人才子時に遺賢有り、一命を聖明に沾さず、千年の恨骨を作る没し。臣の知る所に抛らば、則ち李賀、皇甫松、李群玉、陸龜蒙、趙光遠、温庭筠、劉得仁、陸逵、傅錫、平曾、賈島、劉稚珪、羅鄴、方干有りて俱に顯遇無きも、皆奇才有り。麗句清詞、詞人の口に在りては冤を銜み、恨を抱き、竟に冥路の塵と為る。伏して進士の及第を追賜されんことを望み、各々補闕拾遺を贈らる。敕して莊に奨して、中書門下をして詳酌処分せしむ<sup>19</sup>」とある。その文章によって、彼は確かに生涯官職と無縁であつたことが判明する。たとえ陸龜蒙が一生のうち、限られた何年間かを幕僚としてすごしたとしても、彼の仕事は文筆を持ち、日常の事務を処理し、また地方行政の管理に協力することだけであり、これは朝廷から派遣される正式の官吏の任務とは異なるのである。このことに対して、陸龜蒙は「未だ嘗て有司に對問を干めず品第希なり」（『復友生論詩書』）と言っている。従つてその文集に収められた作品のうち、政治的な色彩の濃厚なものには、あまりみるべきところがないのであろう。

## 五

陸龜蒙の一生はその経歴から主に三つの時期にわけられる：

第一の時期…二十歳（宣宗太中十三年頃、八五九年）から三十一歳頃（僖宗咸通十一年頃、八七〇年）までの十一年間。この時期に彼は科挙受験に参加して、官吏になるべく苦勞していたため、家郷にいる時間は少なかつたと思

われる。

第二の時期…三十二歳から三十九歳頃（僖宗乾符五年頃、八七八年）にかけて。この頃彼は半ば隠居生活を送りながら家郷に住んだ。しかしそれと同時に、官吏になって官界に入るといふ志向をも依然として抱いていたため、長官に拝謁したりもしていた。

第三の時期…四十歳頃から四十三歳頃（僖宗中和二年頃、八八二年）の逝去まで。この時期は一番短く、ただわずかに二、三年の間である。この時期の陸龜蒙は官吏になる意欲を完全になくしており、震澤の別荘で隠居の生活を送り、亡くなるまでずっと蘇州を離れることはなかった。

現存する作品から判断すると、陸龜蒙が隠逸生活を最初に欲したのは咸通十一年の夏頃である。その時、皮日休が長雨が止むように祈る「日ごい」の祭りを主宰した後、陸龜蒙を誘って一緒に太湖に遊びに行った。太湖で皮日休が作った湖を題材とする二十首の詩に唱和して、陸龜蒙も詩を作った。太湖の素晴らしい風景を鑑賞しているうちに、陸龜蒙の心中には隠遁の考えが萌えてきて、その詩の十五番目の『銷夏灣』には「我真に魚鳥の家、室を尽くして扁舟を営む。名を遺し復た世を避け、銷夏し還た銷夏す」と詠い、十九番目の『崦里』には「余知る隠地の術、以て真仙に齊しくすべし。終にこれに従って遊ぶに当り、庶はくは復た天に全うせんことを」と詠んだのである。思うに、その時から彼の願望は二つの矛盾する方向へと進んでいったのだろう。即ち彼は一方では、「仕官して大きな業績を上げたい」と思うものの、もう一方では「世俗に束縛されず隠遁して自由な生活を追求したい」との思いに駆りたてられていったものと考えられる。

陸龜蒙は文学史上、一生官吏とはならず、隠士として過したことよって有名であるが、彼の生涯をふりかえってみると、自分の意志で隠遁した時期はむしろごく短かったと言える。彼は当初、隠士になるのを願っていなかったというのに、運悪く志を遂げることができず、結果的には一生隠居することになってしまっただけである。

彼はただ官職を求めたのみならず自分の政治的才能に対しても十分に自信を持っていたようだ。『村夜』二首の二に

平生受仁義，所疾唯狙詐。上誦周孔書，沈湎至酣籍，豈無至君術，堯舜不上下。豈無活國術，頗牧育教化。

陸龜蒙の隠居について（胡）

蛟龍忍干死，雲雨終不借。弈臂束如囚，徒勞誇善射。才能謂箕斗，辯可移嵩華。若與毗輩量，飢寒殆相耶。長吟倚清瑟，孤憤生遙夜。自古有遺賢，吾容偏稱謝。

平生仁義を受け、疾む所は唯だ狙詐のみ。上は周孔の書を誦し、沈湎して酣籍に至る。豈に君の術に至ること無くんば、舜も上下ならず。豈に国を活かすの術無くんば、頗る牧して教化を齊しくせん。蛟龍の干死するに任せ、雲雨終に借りず。弈臂束ねられし囚の如く、徒勞して善射を誇る。才能は箕斗を誦め、弁は嵩華を移すべし。若し毗輩と量れば、飢寒すること殆んど相亜がん。長吟して清瑟に倚り、孤憤遙夜に生ず。古より遺賢有り、吾が容偏へに称謝す。

と歌っていることからそれがわかる。陸龜蒙は堯舜と比べられるほど自分には才能があると自負している。その才能にもかかわらず、朝廷の外に放り出された運命を嘆き、その悲しみと憤りを作品中に詠み込んでいたのである。ところで晩唐期において、進士に登第できなければ、官界に入る可能性は殆どない。陸龜蒙にしても盛唐時代の文人達と同様に、進士にならなければ朝廷に入って丞相になる可能性はなかった。陸龜蒙は「世は既に文章を賤しむ、帰り来りて躬耕を事とす」という嘆きを詩に綴っているが、それは彼が隠居するに至った外的要因（社会的現実）を表わしている。

こうした外的な要素以外に、もう一つ彼が隠遁を願った理由として、陸龜蒙の性格的（内的）要因があげられる。陸龜蒙は一生世俗を蔑視して受け入れなかったが、そうすることによって自分の心を満足させ、世俗に束縛されることのない自由な生き方を追求したのである。『新唐書』の本伝には彼が「少高放」であったと述べ、『甫里先生伝』は次のように記している、

性不喜與俗人交，雖詣門不得見也。不置車馬，不務弔慶。内外姻党，伏臘喪祭，未嘗及時往。……先生性狷急，遇事発作，輒不 containment，尋復悔之，屢改不能矣。

性は俗人と交わるを喜ばず、門に詣ると雖も見るを得ざるなり。車馬を置かず、慶弔に務めず、内外の姻党、伏臘、喪祭にも、未だ嘗て時に及ぶも往かず。……先生の性狷急にして、事に遇いて発作し、輒ち忍ぶを含まず、尋いで復たこれを悔い、屢々改むるも能はざるなり。

このように彼は狷介かつ豪胆な性情をもっていたため、官途上の騙し合いや、他人との軋轢のために悔しい思いをすることには耐え難かったであろう。彼は自分の隠居と農作を他人から嘲笑されることに關して一顧だにせず、飄々としていたという。「諸侯の邑里を分つを共にせず、天子の陞陞を専らにするに與からず」（『江湖散人歌』）という語からは、更に狂放な隠士の姿が浮かび上がってくる。陸龜蒙はそこで「江湖散人」と自称したのであろう（この「散」という語の意味は彼が『江湖散人歌』において「散誕の人、心散、意散、形散、神散」と述べることから「禮樂に拘われない」と解釈できる）。『新唐書』の本伝には「時に江湖散人、或は天隨子、甫里先生と号す、自ら涪翁、漁父、江上丈人に比す<sup>20</sup>」という、自分を歴史上有名な隠士に例えたエピソードが載せられている。その中の「天隨子」と言うことばからは、老荘思想的色彩が明らかに感じられる。老荘思想は一般の人間の生き方とは異なり、伝統的な礼儀や道徳に拘束されず、天と自然に従って生きることを最高の理想としたのであるから、官僚制度に縛られることなく、個性を自由に解放するために陸龜蒙が隠居したことが、この「天隨子」という自称からも読みとれる。

しかし自由な隠士としての面をもつ一方で、彼は世のなかに不平不満を抱き、現実の弊政を取り除くことを自分の任務と考え、社会中に存在する諸悪を批判する作品を数多く創作している。陸龜蒙は創作する際、諷諭をどのように実践するかに主眼をおき、その結果、創作表現の内容は伝統的な儒家の道にしたがうべきであると強調した。『復友生論詩書』には次のように言う、「僕少くして文章を攻めず、止だ聖人の書を読み、其の言を誦し、其の道をおもふのみなれども、いまだ得ざるなり。毎に意味を涵咀し、……我は小より獨り六經、孟軻、揚雄の書に、頗る熟せしこと有り、文の旨趣と規矩を求めて、これより出ずるなし<sup>21</sup>」と。『甫里先生伝』にも「先生の性野にして羈檢無く、好んで古の聖人の書を読み、六籍を探り、大義を識る。就中春秋を樂しみ、微旨を抉摘す。文中子仲淹の爲す所の書を見て云はく、三伝作りて春秋散じ、深く以て然りと爲すと<sup>22</sup>」と述べている。陸龜蒙は王通を常に手本として、王通が儒家思想を復興しようとしたのと同様に古文運動に取り組み、古文を書くことを提唱することによって儒家の創作原則をまもり、儒家の道でもって現実に影響を与え、儒家の政治と社会の理想を実現しようと考えたのであった。彼は詩文の創作においても、諷諭を旨として、現実を積極的に表現し、社会に存在する様々な矛盾を

指摘しようとした。例えば、彼の『苔賦序』には

江文通嘗著『青苔賦』、置苔之状則有之、勸之道則未聞也。如此則化下諷上之旨廢、因復為之以嗣其声。

江文通嘗て『青苔賦』を著わし、苔の状を置けば則ちこれ有り、勸の道は則ち未だ聞かざるなり。此くの如ければ則ち下を化し上を諷するの旨廢す、因りて復してこれを為りて以て其の声を嗣ぐ。

と言っている。彼は『蚕賦序』にも「詩人碩鼠の刺、ここに有り」と述べ、その創作の主旨を明らかにしている。長年にわたる隱居生活を通じて、陸龜蒙は農村の生活実態をより深く理解し、その体験は彼の農民に対する同情を深めさせることとなった。彼は農民の生活の貧しさや苦しさを述べ、為政者に対して農村の生活条件を改善するように積極的に要求する作品を数多く残している。『春寒賦』においては、宋玉が楚の襄王に対して「自分の享樂のために百姓が苦しむのを忘れないように」と諫めた故事を借りて、当時の現実を諷論した。また『記稻鼠』においては、早魃、洪水で農民には収獲がないのに、官吏は税収を減免するどころか、無理に税を徴収し、時にはきびしい処刑まで加えたりして、農民達が苛酷な待遇にさらされている現実を述べている。そのほか『蟹志』、『禽暴』、『耒耜経』等のような作品はすべて厳しい農村生活を描くことによつて、時政を強く批判し、儒家の農事を重視し民を本とする原則を回復するよう求めるものである。こうしたテーマは普遍的に陸龜蒙の作品中に見られるものである。

もう一方で、繰り返し述べてきたとおり陸龜蒙は自分の趣味や娯樂を隱逸生活の中心としている。彼は『甫里先生伝』の中でそのことを次のように詳しく述べる。

先生平居以文章自怡、雖幽憂疾病中、落然無旬日生計、未嘗然暫輟。点竄塗抹者、紙札相庄、投於篋箱中、歷年不能淨写一本。或好事者取去、後於他人家見、亦不復謂已作矣。……好潔、幾格、窓戶、硯席、剪然無塵埃。得一書詳熟、然後至於方冊、值本即校、不以再三為限。朱黃而毫、未嘗一日去手。所藏雖少、咸精実正定相傳。借人書、有編簡斷壞者輯之、文字謬誤者刊之、樂聞人為学、講評通論不倦。有無頼者、毀折揉汙、或藏之不返、先生戚然自咎。

先生平居文章を以て自ら怡しむ、幽憂の疾病中と雖も、落然として旬日生計なければ、未だ嘗て暫らくも輟め

ず。点竄塗抹する者は、紙札相圧し、筐箱中に投じて、年を歴るも一本も淨寫する能はず。或は好事者取り去りて、後他人の家に於て見るも、また己の作りしとは謂はず。潔を好んで、幾格、窓戸、硯席、剪然として塵埃なし。一書を得て詳熟し、然る後方冊に至る、本に値ひては即ち校し、以て再三を限と為さず。朱黄にして毫、未だ嘗て一日も手を去らず。藏する所少しと雖も、感な精実に正定して相ひ伝ふ。人の書を借りて、編簡の断壞する者有らばこれを輯む、文字謬誤する者はこれを刊る。樂しみて人の学を為すを聞き、講評通論して倦まず。無頼なる者有らば、毀折揉汙す、或いはこれを蔵して返さざれば、先生感然として自ら咎む。

と。この書物への嗜好は他の文人と陸龜蒙の唱和詩中にもしばしば見られるものである。また彼には喫茶の嗜好もあつた。

先生嗜茶筭、置園於顧渚山下、歲入茶祖十許薄、為甌犧之実、自為品第書第一篇。繼『茶經』『茶訣』之後、南陽張又新嘗為『水説』、凡七等。其二曰惠山寺石泉。其三曰、虎丘寺石井。其六曰、吳松江。是三水距先生遠不過百里、高僧逸人時致之、以助其好。

先生茶筭を嗜み、園を顧渚山の下に置き、歲入の茶祖十ばかり薄にし、甌犧の実を為し、自ら品第の書第一篇を為す。『茶經』『茶訣』の後を繼ぎて、南陽の張又新嘗て『水説』を為るに、凡七等あり。其の二を惠山寺の石泉と曰ひ、其の三を虎丘寺の石井と曰ひ、其の六を吳松江と曰ふ。是の三水先生を距つること遠きも百里を過ぎず、高僧逸人時にこれを致し、以て其の好みを助く。

右のように、陸龜蒙は茶を飲み、茶を研究することに対して意欲旺盛であつたため、一連の『茶具詩』という詩を作つて、茶具の種類、お茶の飲み方などを詳しく述べたりもしている。

その他、陸龜蒙には釣りの趣味もあつた。『甫里先生伝』には「時に小舟に乗り、蓬席を設けて、一束の書、茶竈、筆床、釣具を賣ち、船郎の櫂ぐのみ。」という詩句が見え、また『漁具詩序』には「天隨子、海山の顔に獻じて年有り。矢漁の具、そのき趣を窮極せざるなし。」<sup>25</sup>と云う。以上から判る通り、彼は古代の隠逸文人の樂しみとして個別に存在していた「本を読む、文章を書く、お茶を飲む、舟に乗つて釣りをする、酒を飲む、薪を刈る、耕作する、友達とつきあう、僧人と交遊して、山水の間をのんびりままにぶらぐ」などといった各種の趣味的行為を



パターン化して、自分の隠居生活の中に意識的に集約しつつ取り込んでいったのである。これは極めて注目し得る行動である。

なぜならば昔から隠居文人は数多くいるが、陸龜蒙の世代、すなわち晩唐以前には上記の隠士の楽しみをひとまとめにして独自の隠逸生活を形成した者はほとんど存在しなかったからである。ところが晩唐に到るや、そのような生き方をする者が多く出現した。その原因について考えるに、晩唐に到ると、文人の中からも隠居する者が輩出してそれが一つの社会現象となり、山水の間に住む隠遁の暮らしが次第に文人達の間で普通のこととなったため、隠士の暮らしも多趣味の傾向へと変わっていったのである。陸龜蒙が隠居を選択したこともその明らかなる表れであるとしてとれる。彼は個人の利益を中心として、社会に対して責任を取ろうとはせず、自分自身の楽しみと快適さを追求しようとした。そこには「気分に合うかどうか」ということが人生の価値基準となる、新時代の隠士の考え方があらわれているといえよう。

陸龜蒙は一生の間、滅亡へと向う唐王朝を救うために役立ちたいと願い、家郷で隠居している時でさえ、伝統的、積極的な文人精神を決して捨てようとはしなかった。それゆえに隠士になることは決して彼の本心ではなく、自分を隠士と呼ぶねばならないわが運命を嘆いたほどであった。しかしその一方で、彼は自分の隠遁暮らしに個人的な好みと淡泊な情趣を持ち込み、文人の新しい隠逸生活を形成して、自分の作品中にその隠逸の風趣を強く反映させたのである。

一般に晩唐時代の文人の生活とその作品は強い仕官への熱意に溢れているが、一方、その後の宋代の文人の生活と創作傾向は閑適かつ安逸的なものであると言われている。唐代と宋代の文人達における生活と創作の特徴が、そのように明らかに変化をとげたのだとしたら、晩唐という過渡期を生きた陸龜蒙の人生と作品はその変化そのものを明らかに体现しているとは言えないだろうか。まさに両時代の交錯点に生活していた陸龜蒙という文人——彼の人と作品については今後、更なる研究が必要であろうと考える。

- (1) 近年発表された日中両国の論文中に、陸龜蒙の隠居に関する研究は見あたらない。
- (2) 中華書局一九九〇年出版。
- (3) 陸龜蒙の文章は『全唐文』巻八百一所収。
- (4) 『旧唐書』巻百七十七参照。
- (5) 原文は「自遣詩者，震澤別業之所作也。故疾未平，厭厭田舎中。農夫日以耒耜事相晤，每至夜分不睡，則百端興懷攬人思，益紛乱無緒。」
- (6) 陸龜蒙の詩は『全唐詩』巻六百七十一—六百三十所収。侯景の反乱に関する記事は『梁書』巻五十六参照。
- (7) 皮日休は終生官吏として朝廷に仕えた。しかし、彼の作品の根底には官職を辞し隱遁へ向かおうとする希望が常に流れている。咸通十年に蘇州に赴いて、崔璞のもとで仕事をし、同年に陸龜蒙と交遊関係を結んで以来、三年間親交がつづいた。陸龜蒙と皮日休の詠酒、詠茶、詠樵薪、詠漁具などの唱和詩のうち、詠酒と詠茶の詩は皮日休がまず作り、陸龜蒙はそれに和したものである。
- (8) 「五年重到旧山村」説については、『全唐詩』と『全唐詩稿本』が「別」字に注して「一作到」と言うのみであり、本文に「到」字を用いた版本は未見である。この点については諸先生方の御教示を待ちたい。
- (9) 唐、陸広微の『呉地記』参照。
- (10) 清、王鑿著、『甫里集』巻二十参照。
- (11) 原文は「陸魯望宅在臨頓橋。皮日休云「不出郭曠若郊墅」。魯望『幽居賦』云「陸子居全吳東距長洲故苑一里」，又云「地接虎丘，門臨鶴市」。又有別墅在甫里，魯望躬耕於此。有地數畝，有屋三十楹，有田奇四百畝。其居後為白蓮花寺，建祠堂塑像。」「臨頓，旧為吳中聖地。陸龜蒙居之，不出郭曠，曠若郊墅，今城東北有臨頓橋。」巻十七言「臨頓橋，在長洲県北。臨頓，呉時館名。取之臨頓宅者，是也。……唐陸魯望常居其旁。」
- (12) 宋、文朱長者、『叢書集成』本参照。

陸龜蒙の隠居について（胡）

- (13) 原文は「尋聞天子詔，赫怒誅叛卒。宵旰憫烝黎，謨明問征伐。王師雖繼下，賊壘未即拔。此時淮海波，半是生人血。」
- (14) たとえば、『登科記考』卷二十三には『太平廣記』を引いて「咸通十一年，龐勳盜りて以て徐州に抛り、久しく戎卒に屯す、連年の飛輓、物力方に虚ならんとす。因りて召して、権に貢挙を停むこと一年。是の歳、進士盧尚卿遠きより闕に至り、詔を聞きて回り、乃ち『東婦詩』を賦して曰く、『九重の丹詔塵埃に下る、深帷の閨文才を選ぶを罷む。桂樹放教され月の長きを遮ぎり、杏園終に隔年開くを待つ。』」と述べる。
- (15) 原文は「雲似無心水似閑，忽期名在貢書間。煙霞鹿弁聊懸著，隣里漁樵暫解還。文章病来猶滿篋，菓苗衰後即離山。広寒宮樹枝多少，風送高低便可攀。」
- (16) 宋、談淪著。
- (17) 宋、陳文亮、劉文富著。
- (18) 崔璞、伝は不詳、『唐詩記事』卷六十四に「唐末に大司馬を以て蘇州刺史に諫す」とある。
- (19) 原文は「唐召宗光化三年十二月，左補闕韋莊奏，詞人才子時有遺賢，不沾一命聖明，没作千年恨骨。刼臣所知，則有李賀、皇甫松、李群玉、陸龜蒙、趙光遠、温庭筠、劉得仁、陸逵、傅錫、平曾、賈島、劉稚珪、羅鄴、方干，俱無顯遇，皆有奇才。麗句清詞，在詞人口，銜冤抱恨，竟為冥路塵。伏望追賜進士及第，各贈補闕拾遺。救授莊，而令中書門下詳酌処分。」
- (20) 涪翁は東漢の隱士で、生平は不詳。漁父は戦国時代の隱士、『楚辭・漁父』を参照のこと。
- (21) 原文は「僕少不攻文章，止読聖人書，誦其言，思其道，而未得也。每涵咀意味，……我自小獨六經、孟軻、揚雄之書，頗有熟者，求文之旨趣規矩，無出其里。」
- (22) 原文は「先生性野無羈檢，好読古聖人書，探六籍，識大義。就中樂春秋，扶摘微旨。見文中子仲淹所為書云，三伝散作春秋，深以為然。」
- (23) 王通（五八四―六一八）は隋末唐初の有名な儒家思想家、「隋末大儒」とよばれ、主な著作『中説』は『論語』を模倣して作る。唐代の復古風潮に大きな影響を与えた。
- (24) 『茶經』は中唐の隱士陸羽（『新唐書』卷百九十六隱逸伝参照）の著。『茶訣』は唐僧皎然の著、すでに散逸してい

る。『水説』は唐、張又新（『唐才子伝』に伝あり）の著。  
（25）原文は「時乘小舟，設蓬席，賣一束書、茶籠、筆床、釣具、權船郎而已。」「天隨子獻於海山之顏有年矣。矢魚之具、莫不窮極其趣。」

陸龜蒙の隱居について（胡）